



デュルケーム／デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第17号〔2021年7月8日発行〕

Website: <http://fjosh524.in.coocan.jp/durkheimian/index.htm>

Mail: durkheimians@gmail.com Twitter: <https://twitter.com/durkheimians>

世話人（50音順）：池田祥英＋白鳥義彦＋古市太郎＋山田陽子

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中であって、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム／デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的を開催する。

1. 研究例会概要

第40回研究例会（2021年3月21日、Zoom開催）

第1部 自由報告

報告 山田陽子（追手門学院大学）

新型コロナ禍における女性の自殺－『自殺論』再考

コメンテーター：江頭大蔵（広島大学）

司会：小川伸彦（奈良女子大学）

第2部 合評会

『社会学の基本 デュルケームの論点』を読む

*パート1：講評

評者：油井清光（神戸大学名誉教授）

評者：流王貴義（東京女子大学）

*パート2：全体討議

司会：小川伸彦（奈良女子大学）

【第 40 回研究例会報告要旨】

第 1 部 自由報告

報告 山田陽子（追手門学院大学）

新型コロナ禍における女性の自殺－『自殺論』再考

2020 年、日本国内の自殺者数が 11 年ぶりに増加に転じた。特に女性の増加が顕著である。ただし、警察庁の自殺統計（令和 2 年の月別自殺者数）によれば、年間を通して自殺者数は定石通り男性の方が多く、女性のそれは男性の 2 分の 1 程度におさまっている。月別自殺死亡率（人口 10 万人当たりの自殺者数）も 14～20 の間を推移しており、自殺者 3 万人時代（1998～2012 年）の到来を告げる年となった 1998 年の 26.0 や、その間の最高値である 2003 年の 27.0 からすると低い（警察庁 2020, 厚生労働省 2020）。だが、男女の合計で見ると 7 月から、女性に限れば 6 月から増加している対前年同月の増減率の推移が 11 月に入って大きく報じられ、人々に衝撃をもって受け止められている。女性の自殺の前年比増減率は 6 月 2.8%、7 月 17.6%、8 月 44.2%、9 月 29.3%、10 月に至っては 82.8% の増となっている（厚生労働省自殺対策推進室 2020）。比較対象とされている 2019 年の自殺率が、統計を取り始めた 1978 年以降で最小の 16.0 を記録していたため、2020 年にそれらが大幅に増加しても、現状はなお自殺者 3 万人時代より低い水準にとどまっている。とはいえ、2020 年の夏から秋にかけて、前年の同時期と比して急激に女性の自殺が増えたことは確かである。

エミール・デュルケームは、主著の一つ『自殺論』の中で、自殺が増える時、社会もまた危機であるとした。個人が危機的であることは、その個人が生きる社会が危機的であることを示している（Durkheim 1897）。2020 年、COVID-19 の感染拡大により世界は混乱に陥った。日本では緊急事態宣言の出された 4、5 月の自殺者数は例年よりも低く抑えられていたが、解除後の夏から秋にかけて急増し、それは女性により顕著な傾向として表れている。これをどのように捉えるべきか。

国内では、非正規雇用の女性の解雇や雇止め、シングルマザーの生活苦などが大きく報じられているが、これは世界的にも同様の現象が確認されている。国際労働機関は 17 億人の子どもが休校になったあおりを受け、多くの女性がキャリアを断念したと報告している。2020 年の第 2 四半期の 55 カ国のデータによれば、女性の非労働力化は男性の 1.7 倍に達し、とりわけ 6 歳未満の子どもがいる女性の労働力率の低下が顕著である（ILO 2020）。しかしながら、2020 年秋の時点での日本国内の自殺統計を原因・動機別にみると、女性の自殺者の総数は 826 件、そのうち原因・動機が少なくとも 1 つが特定されたのは 572 件であり、上から「健康問題」490 件、次が「家族問題」142 件、「経済・生活問題」44 件、「勤務問題」36 件である（10 月暫定値）。巷間では自殺の増加と非正規労働の女性の解雇や雇止め、

生活苦との関連が示唆されることも多いが、「経済・生活問題」による自殺は「勤務問題」と合わせても、上位2つと比して多いわけではない。

自殺の原因・動機の内訳を見ると、「健康問題」に分類されるのは、病気の悩み、身体の悩み、病気の悩みの影響、統合失調症、うつ病、アルコール依存、薬物乱用、身体障碍の悩み等である。また、「家庭問題」の内訳は、親子不和、夫婦不和、家族の死亡、将来に対する悲観、しつけ・叱責、子育ての悩み、被虐待、介護・看護疲れである。そして、「経済・生活問題」に該当するのは、生活苦、倒産、事業不振、失業、就職失敗、負債、自殺による保険金支給等である。警察庁の自殺統計は、捜査の過程で、遺書、自殺サイトへの書き込みやメール等の SNS の内容、生前の言動等を総合して「原因・動機」を確定し、それを取りまとめて発表している。原因・動機は3つまで計上可能であるため、その組み合わせのパターンは無数にある。ただし、何が原因かを特定できないものも実は多い。原因・動機が1つも特定できなかったことを意味する「不詳」は826件中254件に上り、これは動機が特定されたケースと並べると「健康問題」の次にあたる。すなわち、失業や貧困や暴力等、傍からみてわかりやすい要因がなくても、むしろすべてにおいて恵まれているように見える人であっても、生きることをやめることもある。自殺の動機は、自殺の数だけあるうえ、統計に現れるのは警察が解釈した限りでの「動機」である。

したがって、個々の自殺の動機だけを見ても、あるいは個々の自殺に至るライフヒストリーだけを丹念に追っても、2020年の自殺率の上昇、特に女性に顕著なそれがなぜ生じているのかは分からない。個人的な動機やそれぞれの事情に思いを巡らせつつ、それらを超えた社会的な要因について検討する必要がある。

どのような属性の女性の自殺が増えているのかを確認すると、総数826件のうち、「同居人あり」が553件、「同居人なし」が179件であり、誰かと同居している女性が自殺する件数がそうでない件数の3倍となっている。さらに「同居人あり」553件を職業分類で区切ると、「無職」の「同居人あり」が最も多く、さらにその内訳を確認すれば「主婦」136件、「年金・雇用保険等生活者」130件、「その他の無職者」109件となっている。いわゆるパート主婦や非正規労働の主婦は上記「無職」の「主婦」に該当する。

「同居人あり」の女性が多く亡くなっていること、自殺の動機・原因でも「家庭問題」が上位であることから、特に家庭という領域で何かが起こっていることが推測される。「密」の回避による孤立や孤独と裏腹に、家庭内が密になることによる混乱とコンフリクトが生じている。新型コロナ禍における女性の自殺について検討する際、重要なのは近代以降維持されていた職住分離の社会構造が、職住未分離もしくは職住の新たな結びつきの状態に入った点である。そして、それに伴い、20世紀を通して外部化されてきた家族のケア機能や次世代の養育機能が家庭へと回帰してきたことが、とりわけ女性に過重負担と混乱を生じさせている点である。社会的に見た場合、「新しい生活様式」というのはこの意味で理解されねばならない。本研究報告では、新型コロナ禍における社会構造の変化について、主に分業と家族の機能という点から考察することにより、女性の自殺の増加について検討する。

そして、それを通して、既婚者は未婚者ややもめよりも自殺から守られる、もしくは「家族の密度（家族の構成員が多い）」が高い方が自殺への抑止力が高まる、ただしその恩恵をより受けるのは女性よりも男性である、とみなしたデュルケームの『自殺論』について再考する。

参考文献：山田陽子, 2021, 「家族というゾンビー——E.デュルケーム『自殺論』を再訪する」『現代思想』49(2), 107-18, 青土社.

※ 第2部 合評会 パート1：講評は、『社会学雑誌』第38号に掲載されます。

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/ISSN=02895374.html>

2. SNS アカウント作成のお知らせ

2021年よりTwitterで情報発信を始めました。アカウントをお持ちの方はぜひともフォローをお願いいたします。また、告知・周知したい内容や業績がある方はぜひとも情報提供をお願いいたします。アカウントは@durkheimiansです。

<https://twitter.com/durkheimians>



3. 次回研究会のお知らせ

次回の第 41 回研究例会は、2021 年 10 月 2 日（土）13:00～17:30 に前回と同じく Zoom により開催の予定です。下記の二つの報告を予定しております。会員の皆様の多数のご参加をお待ちしております。

水谷友香会員（京都大学）「デュルケムの道徳教育論―意志の自律性に注目して―」（仮題）
武内保会員（早稲田大学）「集合的記憶論における *mémoire* 概念について」（仮題）

4. 新世話人からのご挨拶（50 音順）

早稲田大学の池田祥英です。これまでデュルケムの論争相手のタルドについて研究してきました。デュルケムについてはついついタルドと関係のあるところばかり読んでいたのですが、この会でいろいろなテーマで研究されている方からお話を伺うことができ、視野を広げることができました。世話人としては、江頭先生から引き継いでニューズレターを主に担当いたします。至らない点多々あるかと存じますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

この度、新世話人の一員となりました神戸大学の白鳥義彦です。神戸大学の私の前任者である大野道邦先生が中心となって本会が立ち上げられて 20 年、これまでの世話人の方々のご尽力により、毎年 2 回の研究会が継続して開かれてきたことに心よりお礼申し上げます。本会は院生を含む若手の方々が常に新たに加わって平均年齢が上がらずにいる（おそらく）ところが素晴らしいと思います。これからもこのオープンな雰囲気を大切にしながら、皆様とともに活動を盛り上げていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度より、世話人の一人を務めます文京学院大学の古市太郎です。2010 年の京都学園大学での研究会が初参加となります。「初対面にもかかわらず、気さくに接してくれる方が多いな」というのが印象です。研究会の皆様、研究会を維持されてきた世話人の方々に、この場を借りまして御礼申し上げます。今後は、いっそう参加しやすい場となるよう、会場準備（コロナ収束後は飲み会含む）などに尽力していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度より世話人を務めます追手門学院大学の山田陽子です。私が当会に初めて参加したのはポストク時代、道徳的個人主義に関する報告のコメンテーターを担当した時です。それから早十数年が経ちました。この間、メンバーの先生方との交流を通して社会学の奥深さや面白さについて多くの刺激をいただき、感謝するばかりです。微力ながら本会の運営に尽力し、社会学の発展に貢献できれば幸いです。先生方のお力添えを賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

5. 会員業績

- 芦田徹郎, 2016, 「よみがえる芝居小屋——その社会学的研究序説」『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』52: 79-91.
- , 2017, 「書評 宗教情報リサーチセンター編（井上順孝責任編集）『〈オウム真理教〉を検証する——そのウチとソトの境界線』」『宗教と社会』23, 145-48.
- , 2018, 「デュルケム「道徳的個人主義」・再考——その現代化のために」『甲南女子大学研究紀要・人間科学編』54: 191-202.
- , 2020, 「「個人的人格」と「社会的連帯」とのあいだ——デュルケム『社会分業論』・再考」『甲南女子大学研究紀要I』56: 177-84.
- , 2021a, 「社会的分業と連帯」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 32-6.
- , 2021b, 「『星の王子さま』を読む（1）——「子ども」であることと「おとな」になること」『甲南女子大学研究紀要I』57: 99-106.
- 江頭大蔵, 2018, 「個人と社会の異質性とディシプリンの変容」『広島法学』41(3): 41-59.
- , 2019, 「Column 調査の達人 エミール・デュルケム——二次的資料による社会学の構築」『社会と調査』22: 121.
- , 2020, 「デュルケム」川口茂雄・越門勝彦・三宅岳史編『現代フランス哲学入門』ミネルヴァ書房, 93-5.
- , 2021, 「制度」「人間の二元性」「自殺」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 6-9, 19-22, 54-7.
- Fujiyoshi, Keiji, 2021a, “Archives for Maintaining Community and Society in the Digital Age,” *Archives for Maintaining Community and Society in the Digital Age* (ed. by Keiji Fujiyoshi), Springer, 1-12.
- , 2021b, “Introductory Essay,” *Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age* (ed. by Keiji Fujiyoshi), Springer, 1-11.
- 藤吉圭二, 2021, 「モース：贈与」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 158-62.
- 古市太郎, 2018, 「マルセル・モースの理論的現代性——MAUSSが捉える『贈与論』の解釈から」『日仏社会学会年報』29: 1-14.
- , 2020a, 【特集論文】「経済社会学における贈与の意義——交換形態、ネットワーク、制度の狭間」『国際開発研究』29(1): 23-36.
- , 2020b, 「フランス社会学の固有性について——贈与・ネットワーク・制度という視点から——」『日仏社会学会年報』31: 19-31.
- , 2021, 「聖／俗」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 112-6.
- 平田文子, 2018, 「デュルケム社会的連帯論における道徳的原理——『ユダヤの本質』に注目して」『教育哲学研究』117: 62-79, 174.
- , 2019a, 「デュルケムの『集合意識』概念とユダヤの歴史解釈——歴史批判の

- 視点を手掛かりとして」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊26(2): 25-35.
- , 2019b,「教員養成課程における『教育心理学』の学びと学生の自己形成——学生アンケートによる検証」『早稲田大学教育学会紀要』20: 135-40.
- , 2020a,「公教育形成期の思想(2)」,「道德教育」,古賀毅編『やさしく学ぶ教職課程 教育原理』学文社, 92-5, 60-1.
- , 2020b,「デュルケームの『社会的連帯論』に隠されていたメッセージ——アノミーからの離脱を求めて」『第18回埼玉工業大学若手研究フォーラム 2020 講演論文集』: 3-10.
- , 2020c,「フランスの教育制度——公教育制度成立期の教育課程」『早稲田大学教育学会紀要(2019年度)』21: 191-8.
- , 2021,「第三共和制の世俗学校計画とデュルケーム——世俗性と宗教性の狭間で」『埼玉工業大学人間社会学部紀要』19: 19-29.
- 池田祥英, 2020a,「C. H. ド・サン＝シモン——科学と産業にもとづく社会の再評価」松野弘監修・仲川秀樹編『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』ミネルヴァ書房, 2-15.
- , 2020b,「A. コント——「社会学」の誕生」松野弘監修・仲川秀樹編『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』ミネルヴァ書房, 16-29.
- , 2020c,「G. タルド——模倣の社会学理論」松野弘監修・仲川秀樹編『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』ミネルヴァ書房, 46-59.
- , 2021a,「犯罪と正常／病理」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, 49-53.
- , 2021b,「リシャールのデュルケーム批判(1894-1905)——「無意識的社会性」をめぐって」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66: 131-42.
- 笠木丈, 2016,「『シャルリー・エブド』という罫——キャロリーヌ・フレストの「フェミニズム」とイスラモフォビアについて」『生存学』9: 108-18.
- , 2020,「デュルケームとベルクソン——社会の内在性と超越性をめぐって」平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究(B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」(研究代表者 中島道男) 課題番号 15H03409 成果報告書, 118-30.
- , 2021,「カテゴリー」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, 131-5.
- 川本彩花, 2019,「社会学理論・学説の記述における伝記的背景——日本の社会学教科書の分析」『デュルケーム社会学の成立と受容——ディシプリンとしての社会学を考えるために』平成 27 年度～平成 30 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」(課題番号: 15H03409、研究代表: 中島道男(奈良女子大学)) 成果報告書, 278-91.
- , 2021,「ハバーマス: コミュニケーション的行為」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, 216-20.
- 三上剛史, 2016,「「時間」に嗜癖する近代——時間の溶解と社会学理論」『社会学史研究』38: 61-77.
- , 2017a,「個人化論——個人と社会は“結びついて”いるのか?」『TASC

- MONTHLY』 493: 13-9.
- , 2017b, 「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話——Mauss からMAUSSへ」『追手門学院大学社会学部紀要』 11: 1-16.
- , 2017c, 「公共性と市民社会」友枝・浜・山田編『社会学の力』有斐閣, pp.124-127.
- , 2017d, 「社会学の展開」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 824-33.
- , 2017e, 「信頼」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 214-5.
- , 2018, 「「贈る」行為の両義性——『贈与論』再考——モースからジンメルそしてルーマンを経由して」『追手門学院大学社会学部紀要』 12: 1-18.
- , 2019a, 「「社会」の学とアクター・ネットワーク理論——モノドロロジーとモノの理論」『追手門学院大学社会学部紀要』 13: 11-29.
- , 2019b, 「デュルケーム社会学の21世紀——モース『贈与論』と現代社会学の出会い」『平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究(B) 成果報告書』 65-77, <http://hdl.handle/10935/5508>
- , 2019c, 「書評：『ウルリッヒ・ベックの社会学理論』」『社会学評論』 69(4): 511-3.
- , 2020, 「「新しい存在論」を巡る社会学ノート」『追手門学院大学社会学部紀要』 14: 1-15.
- , 2021a, 「ルーマン——機能システムの無モラル性」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, 211-5.
- , 2021b, 「フラット・オントロジーと社会学——「モノ」の地位と「主体」の運命」『追手門学院大学社会学部紀要』 15: 1-17.
- 水谷友香, 2020, 「デュルケーム道德教育論の成り立ち——〈意志の自律性〉の意義」『人間・環境学』京都大学大学院人間・環境学研究科, 29: 25-37.
- 中島道男, 2015, 『ハンナ・アレント——共通世界と他者』東信堂.
- , 2018, 『丸山眞男——課題としての「近代」』東信堂.
- , 2019, 「100年後のデュルケーム——バウマンの批判に答えて」（科研報告書 課題番号15H03409）.
- , 2021a, 「まえがき」「エミール・デュルケームとは誰か」「合理主義」「ガーフィンケル：エスノメソドロロジー」「バウマン：他者とともにあること」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, i-iii, vii-x, 10-3, 198-201, 207-10.
- , 2021b, 「書評 ジグムント・バウマンほか著／園部雅久編・訳『バウマン道德社会学への招待』（上智大学出版）」『週刊読書人』5月28日号.
- 中倉智徳, 2020a, 「第3章 わくわくする, 調べる, 自由になる——はじめての社会学」千葉商科大学人間社会学部編『はじめての人間社会学』中央経済社, 29-41.
- , 2020b, 「講義科目におけるICTを活用した双方向授業とオンライン対応について」千葉商科大学経済研究所編『CUC View & Vision』 50: 46-51.
- , 2021a, 「タルド：模倣」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本——デュルケームの論点』学文

- 社, 144-7.
- , 2021b, 「[翻訳] ブリュノ・ラトゥール&ヴァンサン・アントナン・レピネ著『情念の経済学——タルド経済心理学入門』人文書院.
- 野々村元希, 2018, 「ナショナリズム・ライシテ・道徳的個人主義——フランス第三共和政下の政治的対立とデュルケム」『ソシオロジ』63(2): 23-41.
- , 2019, 「弱肉強食イデオロギーとその階層的背景に関する計量分析——文化的豊かさに注目した試論的検討」『経済社会学会年報』41: 73-86.
- , 2021, 「マートン：アノミー」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 190-5.
- 小川伸彦, 2018, 「都市とコミュニティ——都市研究には社会学のどんな姿が映し出されているか」奥村隆・工藤保則編『はじまりの社会学——問いつづけるためのレッスン』ミネルヴァ書房, 165-82.
- , 2019a, 「書評：堀川三郎著『町並み保存運動の論理と帰結——小樽運河問題の社会学的分析』」『三田社会学』24: 191-5.
- , 2019b, 「『古典化』されるデュルケム——1930年代までのアメリカの社会学誌を中心に」『デュルケム社会学の成立と受容——ディシプリンとしての社会学を考えるために——』平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」（研究代表者 中島道男）課題番号 15H03409 成果報告書, 241-54.
- , 2019c, 「【視点】のこす行為の社会学——もしくは＜弱い贈与＞について」『ソシオロジ』194: 80-1.
- , 2019d, 「学知・地域・観光——ハイブリッドメディアとしての『大学的奈良ガイド』」『奈良女子大学社会学教育研究論集』3: 1-9.
- , 2020, 「制度の作用」木村至聖・森久聡編『社会学で読み解く文化遺産——新しい研究の視点とフィールド』新曜社, 11-7.
- , 2021a, 「アノミー」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 58-63.
- , 2021b, 「コロナとCO2」榎田美雄・小川伸彦編『＜当事者宣言＞の社会学——言葉とカテゴリー』東信堂, 329-30.
- 小川伸彦ほか, 2021, 「【座談会】「だめ連の宣言とその現在」榎田・小川編『＜当事者宣言＞の社会学——言葉とカテゴリー』東信堂, 146-68（神長恒一・ペペ長谷川・榎田美雄と共著）.
- 岡崎宏樹, 2016a, 「規律訓練と主体化（M. フーコー）」西村大志・松浦雄介編『映画は社会学する』法律文化社, 161-72.
- , 2016b, 「〈リアル〉の探求——作田啓一の生成の思想」奥村隆編『作田啓一VS.見田宗介』弘文堂, 258-310.
- , 2018a, 「非合理性と流動性——社会学の境界で考える」『日仏社会学会年報』29: 49-58.
- , 2018b, 「相互作用と自己——〈自分らしく生きる〉とはどういうことか」奥村隆編『はじまりの社会学——問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房, 19-35.
- , 2020, 『バタイユからの社会学——至高性, 交流, 剥き出しの生』関西学院大学出版会.

- , 2021, 「バタイユ：至高性と交流」「カイヨワ：遊びと戦争」「ジラルール：暴力と儀礼」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 174-85.
- 太田健児, 2019, 「F.ビュイッソンにおけるライックな道德教育論の諸問題——〈ライック信仰〉を説くプロテスタントの信仰・理性・自由」『尚絅学院大学紀要』77: 49-58.
- , 2020a, 「デュルケムにおける社会学とエピステモロジー——デュルケム社会学固有の〈科学性〉の問題」『日仏社会学会年報』31: 1-18.
- , 2020b, 「戦後東大教育学理論の系譜と新・教育原理創出の可能性」『尚絅学院大学紀要』79: 45-55.
- 流王貴義, 2017, 「アノミーと同調・逸脱」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力——最重要概念・命題集』有斐閣, 76-9.
- , 2018, 「社会学が政治・公共を論じる困難と可能性——金野美奈子『ロールズと自由な社会のジェンダー——共生への対話』を手がかりに」『東京女子大学社会学年報』6: 1-15.
- , 2019, 『デュルケムの近代社会構想——有機的連帯から職能団体へ』ミネルヴァ書房.
- , 2020, 「自由主義的市民社会の社会学的検討——機能分化社会における政治の位置づけ」『書評ソシオロギス』16: 1-20.
- 白鳥義彦, 2016a, 「フランス高等教育改革の評価と展開」『社会学雑誌』31 & 32: 43-51.
- , 2016b, 「第8章 国内インタビュー調査からの考察」「第10章 フランスの大学改革と上級管理職」『大学における学術管理職と経営管理職の相互関係システムに関する国際比較研究』研究成果中間報告書、平成24年度～平成27年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））（研究課題番号：24243074）、研究代表者：川嶋太津夫、95-120, 131-3.
- , 2017a, 「テキストから見るデュルケム受容」『紀要』（神戸大学文学部）44: 89-107.
- , 2017b, 「機械的連帯から有機的連帯へ」友枝敏雄・浜日出夫・山田真茂留編『社会学の力——最重要概念・命題集—— Sociology : Concepts and Propositions』有斐閣, 218-21.
- , 2018a, 「学問の制度化と大学におけるデュルケムの講座の位置——前任者たちおよび後任者たちの検討を通じて」『紀要』（神戸大学文学部）45: 65-76.
- , 2018b, 「近代化・産業化と教育社会学」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善, 44-7.
- , 2018c, 「知識人と大学」（以上、大項目）、「カウンター・カルチャー」「グランド・ゼコール」「大学論の系譜〔ヨーロッパ〕」「ナポレオン大学体制」「パリ大学」「文人共和国」（以上、中項目）、「アカデミー・フランセーズ」「EHESS」「エドガール・フォール法」「LRU」「グラムシ」「グランド・ゼコール準備級」「コレギウム・トゥリリング」「コレージュ・ド・フランス」「サイード」「CNRS」「総合大学設置法」「デュルケム」「ドヴァケ法」「ユニヴェルシテ・アンペリアル」「リアール」「ル・ゴフ」（以上、小項目）、編集委員：児玉善仁（代表）・赤羽良一・岡山茂・川島啓二・木戸裕・斉藤泰雄・舘昭・立川明『大学事典』平凡社, 63-6, 254, 381-2, 623, 705-6, 742-3, 780-1, 169, 212, 224, 229, 380-1, 382, 448, 449, 453, 546, 569-70, 665, 672-3, 828, 839-40, 860.

- , 2018d, 「生きたデュルケームを求めて」日仏社会学会コラム“A la recherche de Durkheim perdu”, no.59, <http://www.nichifutsu-socio.com/AlarecherchedeDurkheimperdu.html>
- , 2018e, 「一つの時代の区切り」『研究会ニュース』（神戸大学社会学研究会）32: 1-2（2019, 『社会学雑誌』35 & 36: 347-9に再録）.
- , 2018f, [翻訳] イヴ・デロワ著「市民性をめぐるデュルケーム社会学——寄与と限界」『日仏社会学会年報』29: 31-47.
- , 2019a, 「『北』の『地方』における国際結婚——地域ならびに質問紙調査の概要」藤井勝・平井晶子編『外国人移住者と「地方的世界」——東アジアにみる国際結婚の構造と機能』昭和堂, 19-30.
- , 2019b, 「パーソンズによるデュルケーム読解——『社会的行為の構造』再訪」『社会学雑誌』35 & 36: 68-77.
- , 2019c, 「国際シンポジウム：デュルケームとタルド——その現代的意義」「デュルケームにおける正常なものと病理的なものの概念と、その政治的帰結（シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX、北垣徹訳）解説」『日仏社会学会年報』30: 57.
- , 2019d, [翻訳] シルヴィ・アミシ著「社会への移行に向けた生徒の伴走支援におけるキャリア・カウンセラーの位置付け」『日仏教育学会年報』26（通巻番号No.48）: 59-65.
- , 2020a, 「序章 社会学とはどういう学問か——個人と社会」「終章 大学で学ぶということ——『社会学』をこえて」油井清光・白鳥義彦・梅村麦生編『3STEPシリーズ1 社会学』昭和堂, 1-13, 265-78.
- , 2020b, 「新刊紹介 志水宏吉監修、ハヤシザキ・カズヒコ、園山大祐、シムチュン・キャット編著『世界のしんどい学校——東アジアとヨーロッパにみる学力格差是正の取り組み』（シリーズ・学校格差 第4巻＜国際編＞）明石書店, 2019年」『日仏教育学会年報』27（通巻番号No.49）: 104-6.
- , 2020c, 「新刊紹介 マリアンヌ・ブランシャール、ジョアニ・カユエット＝ランブリエール著、園山大祐監修、田川千尋訳『学校の社会学——フランスの教育制度と社会的不平等』明石書店, 2020年」『日仏教育学会年報』27（通巻番号No.49）: 107-9.
- , 2020d, [翻訳] シリル・ルミュー著「フランスにおける社会学の展開」『社会学史研究』42: 133-52.
- , 2020e, [翻訳] フレデリック・ヴィエノ著「グランド・ゼコール準備級——フランス的特殊性」『日仏教育学会年報』27（通巻番号No.49）: 69-72.
- , 2021a, 「道德の三要素」「教育」「中間集団」「デモクラシー」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, 71-5, 88-92, 93-7, 98-102.
- , 2021b, 「フランス専門学校主義」「フランスの大学」橋本鉦市・阿曾沼明裕編著『よくわかる高等教育論』ミネルヴァ書房, 100-1, 116-9.
- 白鳥義彦他編, 2020, 『3STEPシリーズ1 社会学』昭和堂.（油井清光・梅村麦生と共編）
- 杉谷武信, 2020, 「パーソンズのデュルケーム解釈——パーソンズの主意主義的行為理論をめぐって」『デュルケーム社会学の成立と受容——ディシプリンとしての社会学を考えるために』平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」（研究代表者

- 中島道男)課題番号15H03409 成果報告書, 161-73, <http://hdl.handle.net/10935/5539>.
- , 2021, 「パーソンズ 行為と社会システム」デュルケム／デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 186-9.
- 多田光宏, 2016a, 「東日本大震災と福島第一原発事故から遠く離れて: 『自主避難者』に関する熊本大学文学部での社会調査実習」『社会と調査』一般社団法人社会調査協会, 17: 97-103.
- , 2016b, 「リスク社会 (U. ベック)」西村大志・松浦雄介編『映画は社会学する』法律文化社, 231-42.
- , 2016c, 「社会学の基本概念としての時間——現象学的社会学と社会システム理論からの展開」『社会学史研究』日本社会学史学会, 38: 7-24.
- , 2016d, 「書評に込めて」『ソシオロジ』社会学研究会, 60(3): 185-8.
- , 2017a, 「意味と時間」日本社会学会・理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』丸善出版, 184-5.
- , 2017b, 「熊本ダークツーリズム——ハンセン病と『圧縮された近代』を巡る旅」熊本大学文学部編・松浦雄介責任編集『大学的熊本ガイド——こだわりの歩き方』昭和堂, 156-9.
- , 2017c, 「推薦序——獻給走在無徑之道的人們」劉怡君『一個女生走看巴爾幹: 馬其頓、科索沃、阿爾巴尼亞』釀出版 2017, 3-5.
- , 2018, “Language, Ethnicity, and the Nation-State: On Max Weber’s Conception of ‘Imagined Linguistic Community,’” *Theory and Society*, 47(4): 437-66. (First published online: June 29, 2018, DOI: 10.1007/s11186-018-9321-y.)
- , 2019a, “Time as Sociology’s Basic Concept: A Perspective from Alfred Schutz’s Phenomenological Sociology and Niklas Luhmann’s Social Systems Theory,” *Time & Society*, 28(3): 995–1012. (First published online: January 29, 2018, DOI: 10.1177/0961463X18754458.)
- , 2019b, 「はじめに——平成の終わりとグローバル教育の現実」『「グローバル化」を生きる大学生たち——スーパーグローバル大学採択校における「外国語ならびに海外に対する大学生の意識と経験等に関する調査」報告書』熊本大学文学部総合人間学科社会人間学コース・2018年度社会調査実習I/II (多田光宏担当班), 3-8.
- , 2020a, 「無知の無知を超えて——社会学から見た国民国家と教育」『研究紀要』熊本県高等学校地歴・公民科研究会, 50: 2-38.
- , 2020b, “How Society Changes: Sociological Enlightenment and a Theory of Social Evolution for Freedom,” *The American Sociologist*, 51(4): 446–69. (First published online: October 27, 2020.)
- , 2020c, “Language and Imagined Gesellschaft: Émile Durkheim’s Civil-linguistic Nationalism and the Consequences of Universal Human Ideals,” *Theory and Society*, 49(4): 597-630. (First published online: May 04, 2020, DOI: 10.1007/s11186-020-09394-1.)
- 武内保, 2020, 「モーリス・アルヴァックス 集合的記憶論再考——集合的持続・〈過去〉・自由」『ソシオロギス』44:104-22.
- 山田陽子, 2016, 「労働者の自殺の鑑定と補償——労災保険の社会学的分析に向けて」『西日本社会学会年報』14: 35-46.
- , 2017a, 「4. 相互行為 感情労働と感情規則」『社会学理論応用事典』丸善出版.

- , 2017b, 「書評論文：日本における『うつ』の医療化（北中淳子著『うつの医療人類学』）」『保健医療社会学論集』28: 82-91.
- , 2018a, 「書評：貞包英之・元森絵里子・野上元『自殺の歴史社会学——意志のゆくえ』」（青弓社, 2016年）」『社会学評論』68(4): 593-4.
- , 2018b, 「ワーキングマザーの『長時間労働』——『ワーク・ライフ・過労死?』」『現代思想』46(17): 137-46.
- , 2019a, 「子連れ排除型社会からの卒業は可能か——子連れ出勤の社会学」『現代思想』47(4): 110-21.
- , 2019b, 「『デュルケームの論点』刊行に寄せて——デュルケーム没後100周年記念に」中島道男編『デュルケーム社会学の成立と受容——ディシプリンとしての社会学を考えるために』平成27～30年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」研究成果報告書, 269-77.
- , 2019c, 「職場が休息の場に...ワーキング・マザー 過労問題のリアル」講談社現代新書ウェブ2019年5月12日付.
- , 2019d, 「耕論：見えない『残業』可視化を」朝日新聞東京本社朝刊2019年11月2日付.
- , 2019e, 『働く人のための感情資本論——パワハラ・メンタルヘルス・ライフハックの社会学』青土社.
- , 2019f, 「過労死ラインを超える『共働き育児』のリアル——職場でも家庭でも働き続ける親たちの疲弊」東洋経済オンライン2019年11月12日付.
- , 2020a, 「パンデミックに浸蝕される『日常』——文化、教育、不安道徳」『現代思想』48(7): 240-6.
- , 2020b, 「書評に答えて（『働く人のための感情資本論』）」『ソシオロジ』65(1): 78-83.
- , 2020c, 「書評：木下衆著『家族はなぜ介護してしまうのか——認知症の社会学』」『フォーラム現代社会学』19: 110-2.
- , 2020d, 「感情の消費——感情資本主義社会における自己の真正性」森岡正芳編『治療は文化である』金剛出版, 56-61.
- , 2020e, 「書評：D.グレーバー著『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』」公明新聞4面読書欄.
- , 2021a, 「家族というゾンビ——E.デュルケーム『自殺論』を再訪する」『現代思想』49(2): 107-18.
- , 2021b, 「人格崇拜と道徳的個人主義」「ゴフマン：儀礼的相互行為」デュルケーム／デュルケーム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケームの論点』学文社, 126-30; 202-6.
- , 2021c, 「ハラスメントの冤罪——アカハラ、カスハラ、セクハラのはざまで」『都市問題』112: 23-9.
- , 2021d, 「『共感』の文化とハラスメント——『冷たい親密性』が生み出す病」『労働調査』608（2021年6月号）: 23-30.
- YAMADA, Yoko, 2017, Suicides in Worker Accident Insurance: Riskization and Medicalization of Suicide in Japan, Stéphanie Cassilde and Adeline Gilson (eds), *Psychosocial Health, Work and Language: International Perspectives towards their Categorizations at Work.*, Springer, 157-

72.

- 山田陽子ほか, 2018, 「『自殺の歴史社会学——意志のゆくえ』 (青弓社, 2016年) 書評と応答」『明治学院大学社会学部付附属研究所』48: 39-56. (元森絵里子・佐藤雅弘・池田和弘・貞包英之・野上元と共著)
- , 2021, 「短期連載: 治療は文化である 第1回 感情と癒し——心理学と社会学のクロストーク」『臨床心理学』21(1): 119-31. (岩壁茂・森岡正芳と共著)
- 横山寿世理, 2018, 「大学生のディズニー体験と他者依存志向——2017年聖学院大学日本文化学科学生調査結果より」『聖学院大学論叢』31(1):155-67.
- , 2019a, 「ディズニーフィクションの異国性と幻像——社会調査士科目における実習報告として」『緑聖文化』(聖学院大学日本文化学会) 17: 9-18.
- , 2019b, 「日本の社会学教科書の中で生きるデュルケム——デュルケム社会学のパースペクティブと概念をめぐって」中島道男編『デュルケム社会学の成立と受容——ディシプリンとしての社会学を考えるために』平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「社会学ディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」研究成果報告書, 255-68.
- , 2020, 「II <私をめぐる社会学> ④記憶と忘却」宇都宮京子・西澤晃彦編『よくわかる社会学 (第3版)』ミネルヴァ書房, 38-41.
- , 2021a, 「アルヴァックス: 集合的記憶」デュルケム/デュルケム学派研究会, 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編『社会学の基本 デュルケムの論点』学文社, 163-7.
- , 2021b, 「書評: 金瑛『記憶の社会学とアルヴァックス』」『総人・人環フォーラム』(京都大学人間・環境学研究所) 39: 44.

ニューズレター編集担当より

ニューズレター第17号をお届けいたします。昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大でなかなか思うような活動ができませんでしたが、それでも年度末に『社会学の基本デュルケムの論点』を学文社より刊行することができ、さらにZoom上で研究例会を開催することができました。年度が変わった4月からは世話人の体制を新たにして、池田、白鳥、古市、山田の4名が担当することとなりました。本会活動についてのご提案などがありましたら、巻頭記載のアドレスまでご連絡ください。

末筆ながら、本会の創設にあたり中心的な役割を果たされた故大野道邦先生、これまで長い間世話人として本会の運営にご尽力いただきました中島道男先生、江頭大蔵先生、小川伸彦先生に深く御礼申し上げます。(池田)